

大学史 ニュース

日本大学大学史編纂課だより 改題

第11号

2016年9月26日 発行

目次

調査報告

- ◇学徒兵渡邊耕二氏からの聞き取り…………… 4
- ◇創立者 末岡精一の調査…………… 9

連載

- ◇キャンパスになった軍用地①…………… 7



品川（10区）で、法政（中央）・慶應（右）と並走する永野常平選手（左）

駅伝王座の死守—第22回箱根駅伝—

昭和18（1943）年1月、2年ぶりに第22回箱根駅伝（靖国神社～箱根神社）が開催されました。当時日大は、昭和10年の第16回大会で初優勝し、以来、4連覇の達成など駅伝の黄金時代を迎えていました。しかし、この大会は経験者が少ないうえ、長距離選手をそろえられませんでした。

往路は、5区で杉山繁雄選手が4人を抜き、2位でゴールしましたが、トップ慶應との差は5分45秒ありました。復路は、慶應・法政・日大の三つ巴の争いとなりました。10区で日大の前を走る法政・慶應との差は2分余りありましたが、アンカー永野常平選手は、両校を猛追し、品川で捉えました。しばらく並走した後、八ッ山橋で突き放すと、そのままゴールに飛び込み、日大が駅伝王座を守りました。

2葉の写真は、塚本家から寄贈されたものです（3～4頁参照）。



ゴール直後の永野常平選手（中央）・森本一徳コーチ（右）・7区走者の山手学選手（左）

ご挨拶

日本大学企画広報部広報課長
石川 登

平成31（2019）年に創立130周年を迎える日本大学は、教育理念「自主創造」を合言葉に、新しい時代を切りひらく人材の育成につとめています。

平成23年、広報部大学史編纂課（当時）は、日本大学が歩んできた時代ごとのトピックス、大学史上の貴重な資料など、日本大学の歴史に関わる情報を分かりやすく紹介する冊子として『日本大学大学史編纂課だより』を創刊しました。本号からは、号数を引き継いだまま『日本大学大学史ニュース』と誌名を変え、より一層充実した内容で、企画広報部広報課から刊行していきます。

日本大学は、明治22（1889）年に創立された日本法律学校を前身とします。欧米諸国の法律を学ぶことが主流の当時において、日本の法律を学ぶ学校として誕生し、私学としての独自性を大いに発揮して、明治36（1903）年には日本大学に改称しました。

大正3（1914）年に「建学の主旨及綱領」を、昭和24（1949）年に「目的および使命」を制定。さらに、改訂の検討や数年間の審議を経て、昭和34年の創立70周年を迎える際に、現在の表現に改訂しました。

目的および使命

日本大学は 日本精神にもとづき
道統をたつとび 憲章にしたがい
自主創造の気風をやしな
文化の進展をはかり
世界の平和と人類の福祉とに
寄与することを目的とする

日本大学は 広く知識を世界にもとめて
深遠な学術を研究し
心身ともに健全な文化人を
育成することを使命とする

平成18（2006）年には、現在の社会状況に即応し、かつ日本大学の総合性を発揮することを目的として、新しい理念及び目的が検討された結果、翌19年、日本大学の教育理念が「自主創造」と定められました。

日本大学の目的・理念は、社会状況の変化に応じて、幾度かの改訂・制定が実施されましたが、日本大学の伝統・学風は、表現はかわりつつも、現在に脈々と受け継がれています。私たちは、先人の意志を継ぎ、更に教育力・研究力を充実させ、豊かな社会に貢献し、夢のある未来を創り上げなければなりません。

『日本大学大学史ニュース』が、日本大学の豊かな史実と先人の崇高な理想に触れ、広く思慮を深め、日大人としての礎を築いて頂く機会となればと思います。

このほど、戦時中に陸上競技部員であった塚本（旧姓永野）常平の写真アルバム2冊とメダル31個を、塚本家から寄贈を受けました。

常平は静岡県の出身で、昭和13（1938）年に日本大学予科に入学し、商経学部経済学科に進みました。在学中は、兄の準一郎と同じく陸上競技部に在籍しています。兄弟ともに800mを専門とする中距離選手でしたが、箱根駅伝にも2回ずつ出場しています。15年の第21回大会には、兄弟そろって出場し、準一郎は2区を3位、常平は9区の区間賞という好成績で、総合優勝

に貢献

しています。また、常平は1頁で紹介したように、18年の第22回大会では、10区で前を走る2校を抜き、駅伝王座を守りました。2人は、日本大学の駅伝黄金期を支えた選手でした。

準一郎は、昭和17年4月に若くして亡くなりました。常平は、18年9月に卒業しすぐに出征しています。復員後、塚本家の養子となりましたが、家族にも箱根駅伝の活躍について多くを語ることなく、昭和52（1977）年に亡くなりました。最近になって、山本健太氏夫妻（夫人は常平の令孫）と塚本家の方々が、これらの貴重な資料を発見され、御好意により寄贈していただきました。

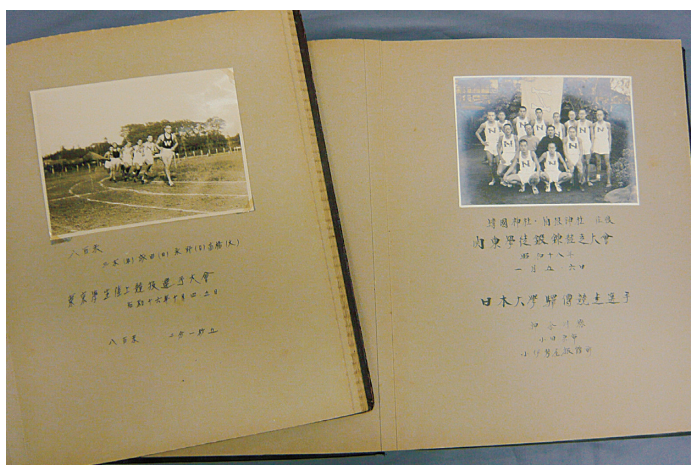
アルバムの表紙には「日本大学」もしくは「nichidai」の名称と校章が入り、写真は、陸上競技部の活動が中心となっています。主に、日本学生

陸上競技対校選手権大会・関東学



昭和15年1月、二宮神社にて、第21回箱根駅伝優勝のお礼参り
後列左常平、右準一郎

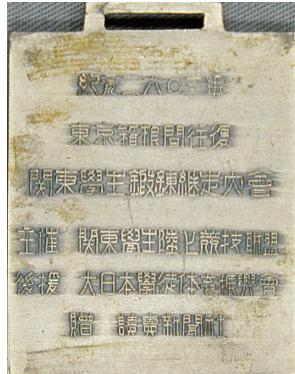
生陸上競技対校選手権大会・東京学生陸上競技選手権大会・大学新人対校戦・箱根駅伝・奥多摩溪谷往復駅伝など各種大会、阿佐ヶ谷の合宿所とグラウンド、松本・浜松・福生での合宿、卒業生送別会などです。他に、予科の朝礼と体操、箱根・鎌倉などへのピクニック、富士板妻での軍事教練など、学生生活の様子を窺える写真も含まれています。ほとんどの写真にはメモやコメントが付され、撮影日や場所などを知ることができ、その価値を高めています。



寄贈された2冊のアルバム
(左昭和15～16年・右昭和17～18年)



長野県松本市営グラウンドでの夏合宿
前列右端常平（昭和17年8月）



第22回箱根駅伝のメダル 左表、右裏

選手も含まれています。また、この時の記念メダルは、まだ知られていないものではないかと思います。この大会は「幻の箱根駅伝」といわれ、関連する資料が少ないことから、日本大学ばかりでなく、箱根駅伝史の上でも貴重な資料といえるでしょう。

(小松)

学徒兵渡邊耕二氏からの聞き取り

今年6月、兵庫県在住の渡邊耕二氏から、学生時代と出征中の体験について、聞き取り調査を実施しました。渡邊氏は、大正9（1920）年に鳥取県に生まれ、昭和13（1928）年4月に日本大学予科に入学、商経学部経済学科に進みました。

在学中は陸上競技部に在籍し、跳躍種目を専門として、関東学生新人陸上競技大会、東京学生陸上競技選手権大会などで活躍しました。また、学校報国隊では防空補助員を命じられ、昭和17年4月の日本本土初空襲に際しては、銀座方面の防空補助隊に配置されました。

昭和18（1943）年9月に卒業、海軍第3期兵科予備学生試験を受験しましたが、病後であったため、身体検査で不合格となりました。翌年、海軍第5期兵科予備学生に合格、艦艇班を命じられ横須賀海軍砲術学校で教育を受けました。20年6月、海軍少尉に任官しましたが、この頃は乗るべき艦艇はほとんどなく、佐世保防備隊に配属されました。8月12日に第3特攻戦隊第31突撃隊へ転属となり、14日に川棚基地で、水上特攻兵器を配備する五島列島鯛の浦の警備隊長に任命されましたが、出撃することなく、終戦を迎えました。

戦時中の大学、戦争末期の日本軍の実情について、直接聞くことができた体験者の証言は、重みのある内容でした。

(小松)



海軍少尉時代の渡邊氏
(渡邊耕二氏蔵)

山田顕義と瓦屋旅館



瓦屋旅館跡地に建立された
「山田顕義と瓦屋」顕彰碑

平成28年7月9日、山口県山口市湯田温泉の瓦屋旅館跡地に建立された山田顕義と瓦屋旅館を顕彰する碑の除幕式が執り行われました。この顕彰碑は、日本大学校友会山口県支部の山口市の校友が中心となり、山田顕義とゆかりの深い瓦屋旅館が同地にあったことを後世に伝えるべく建立されたものです。瓦屋旅館は、山田顕義の夫人である龍子の生家であるとともに、幕末維新时期には志士の会合場所として頻繁に利用された旅館でもありました。今回は、山口市湯田温泉にかつて存在した瓦屋旅館について紹介します。

瓦屋旅館は、少なくとも江戸後期から存在していた旅館です。かつて湯田温泉付近には侍屋敷が2軒ほどしかなく、民家はすべて藁葺き屋根であり、瓦葺きの屋根はこの旅館と藩主が宿泊する御茶屋のみであったた

め、瓦屋と名乗ったと伝えられています（『山口と湯田』）。瓦屋の主人は代々鹿島喜右衛門を襲名しており、後に顕義夫人となる龍子は、嘉永2（1849）年に喜右衛門の長女として誕生します。龍子は瓦屋旅館に程近い現在の井上公園付近に生家があった井上馨の養女となり、顕義に嫁ぎました。

文久3（1863）年、長州藩が萩から山口へ政庁を移して以降、瓦屋旅館は維新の志士らに頻繁に利用されることとなります。同年、八月十八日の政変により、三條実美をはじめとする尊攘派公家らが京都を追放され長州に辿りつきました（七卿落ち）。三條らははじめ三田尻（現防府市）に滞在しましたが、その後、湯田に移ります。この時期、湯田温泉地域は厳戒態勢が敷かれていた様で、尊攘派志士として名高い真木和泉は、同志が傷を負ったので瓦屋で湯治がしたいとわざわざ願い出る書簡をしたためています（「年度別書翰集十八」）。また、七卿と行動を共にしていた土佐藩の土方久元の日記「回天実記」には、瓦屋旅館で土佐藩士らの会談が行われたことも記録されています。

このように幕末期に維新の志士らに利用されていた瓦屋旅館は、明治期にも著名な人物が訪れました。維

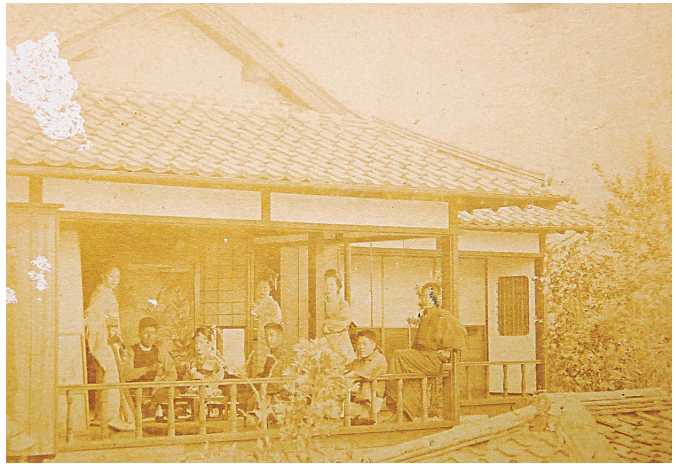
新の立役者の一人である木戸孝允は、長州藩が山口に政庁を移してからは、瓦屋旅館から2kmほど離れた糸米の居宅がありました。木戸の日記によると明治3（1870）年5月17日、木戸は宴席の輔酌のため瓦屋の姉妹を糸米の山荘に呼んでいます。また、山口滞在中は頻繁に瓦屋旅館を訪れ、知人・友人との会食などで利用していました。

明治期の瓦屋旅館の様子は、山口県の初代県令である中野梧一の日記にも克明に記されています。中野梧一は、旧幕臣でありながら山口県の初代県令となった人物で、井上馨は中野を厚遇し、湯田にあった自宅を中野の下宿先として提供しました。瓦屋旅館からほど近い井上の居宅に住んだ中野は、公私にわたり瓦屋旅館を利用しました。



明治期の瓦屋旅館

中野は囲碁を好み、しばしば瓦屋旅館で長州出身者と囲碁を打っています。明治5年1月16日の日記には、「瓦屋ノ娘碁ヲ好ム。和歌ヲ能ス」と記されており、学祖夫人龍子の妹が囲碁を嗜んでいたことが記されています。この「瓦屋ノ娘」と中野は、よく碁を打ったようで、日記には「例ノ大根娘ト碁を囲、敗セリ」「瓦屋ニ至ル。小酌ヲ催シ例娘ナト一同にて囲碁」と、中野が龍子の妹と囲碁を楽しんでいる様子が記録されています。その他にも中野は、山口県庁の吏員や客人とともに囲碁や酒席、書画の鑑賞などで瓦屋旅館を利用しています。このように、明治期の瓦屋旅館は、旅行者の宿泊施設というだけでなく、地域の人々の会合や宴会などの社交の場でもあったことがわかります。



瓦屋旅館での宴席（明治30年）



山田顕義扁額「挹翠楼」

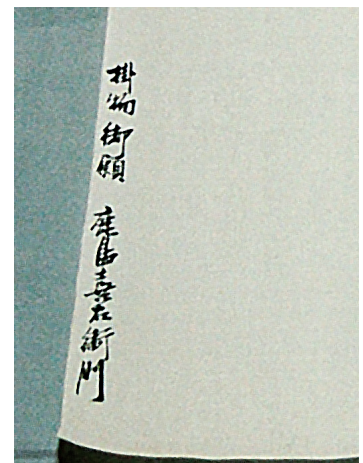
いました。鹿嶋家所蔵の学祖書幅及び関係写真は、本学へご寄贈いただき、現在、当課に保管されています。

これら鹿嶋家に残されている書の裏側には、「掛物御願 鹿島喜右衛門」と記されているものがいくつか確認できました。これは、瓦屋旅館を訪れた著名な人物に対して、旅館の主人があらかじめ用意していた紙に書をお願いしていたことを物語っています。

幕末から明治にかけて、維新の志士、あるいは長州出身者の社交の場として瓦屋旅館は利用されてきました。山口市を訪れた際には、学祖にゆかりのある湯田温泉の瓦屋旅館跡地を訪ねてみてはいかがでしょうか。

(松原)

瓦屋旅館を経営していた鹿嶋家（現在は鹿嶋家と表記）には、客間に飾られていたと思われる画や、旅館滞在者が記した書など旅館を営んでいた当時の資料が残されています。中でも長州出身者の書は伊藤博文や井上馨など、著名な人物の書も残されており、この中には学祖の書も3点含まれて



和紙の裏側に記された「掛物御願」

【参考文献】

福谷繁三郎『山口と湯田』（1928年）
 『木戸孝允日記』（日本史籍協会叢書74、1932年）
 田村貞雄校注『初代山口県令 中野梧一日記』（マツノ書店、1995年）
 山口県文書館蔵「年度別書翰集十八」（毛利家文庫70年度別書翰1-19）
 松原太郎「鹿嶋家所蔵資料の調査について」（『饗誌』創刊号所収、日本大学資料館設置準備室、2005年8月）

キャンパスになった軍用地①（千葉県習志野市・船橋市）



「戦車第二聯隊の跡」碑
(生産工学部津田沼キャンパス)

飼育するための放牧地)の一部だった「大和田原」と呼ばれていた地域で、明治天皇親閲の近衛兵による大演習が実施され、自らこの地域を「習志野原」と命名されました。翌年には演習場一帯を官有地とし、以降、現在の習志野市・船橋市・八千代市・千葉市にまたがる地域に、多くの軍事施設が整備されます。そのひとつ、戦車第2連隊の跡地にあるのが生産工学部津田沼キャンパスです。

明治32年、津田沼村大字大久保に騎兵第1旅団（騎兵第13・14連隊）・第2旅団（騎兵第15・16連隊）の設置が決定、廠舎は連隊番号順



「騎兵第十三聯隊発祥之地」碑
(東邦大学習志野キャンパス)

昭和20（1945）年11月30日で帝国陸海軍は解体されました。駐屯地などの一部は現在でも自衛隊や在日米軍が使用し、軍病院は国立病院や共済病院として引き継がれました。しかし、旧軍とはゆかりのない跡地もあり、施設を教育・研究機関が使用している事例も少なくありません。

日本大学にも、かつての軍用地に所在するキャンパスがいくつかあります。終戦後71年が過ぎ、当時の名残も僅かとなったキャンパスとその周辺の様子を、数回に分けて紹介していきます。

明治6（1873）年4月29日、徳川幕府直轄の牧（軍馬を



赤枠内は昭和57年頃の津田沼キャンパス
(左=西隣は「東邦大学習志野キャンパス」)

に西から並び、34年末に連隊旗が授与されました。習志野は騎兵の町と称され、大正5（1916）年には荏原郡目黒村にあった陸軍騎兵実施学校も二宮村薬園台に移転しました（現陸上自衛隊習志野駐屯地）。

第1次世界大戦で戦車が登場すると、騎兵の快速性を活かした任務は、機甲部隊が受け継いでいくこととなります。昭和7年、騎兵第1旅団の主力が満州に派遣されると、翌8年には、騎兵第13連隊の跡地に騎兵第16連隊、騎兵第14連隊の跡地に新編の戦車第2連隊が移転しました。

昭和21年、戦車第2連隊の跡地を東洋女子歯科医学専門学校（東洋学園大学の前身）が仮校舎とし、22年～25年に設置されていた東洋高等学校（旧制）も使用しました。29年、日本大学短期大学部工科第1部が駿河台から移転します。31年には工学部（現理工学部）が校地として取得し、32年に工業経営学科を移転。40年1月、同学科を母体に第一工学部が創設され、1年後に生産工学部と改称しています。

西に隣接しているのは、東邦大学習志野キャンパスです。昭和21年、帝国女子医学薬学専門学校薬学科・帝国女子理学専門学校（現東邦大学薬学部・理学部）は旧軍施設の使用許可を得ました。その後、東側の騎兵第15連隊跡地の大半も払い下げを受け、昭和48年には東邦中学校・高等学校が移転しています。

騎兵第16連隊が移った跡には、化学戦を研究する陸軍習志野学校が開校します。戦後は千葉医科大学附属腐敗研究所（千葉大学真菌医学研究センターの前身）が設置されましたが昭和52年に移転し、財務省管理の「習志野の森」となっています。周辺には公営住宅などが建っています。



陸軍習志野学校正門跡（習志野の森）



司令部跡の「八幡公園」に残る門柱

廠舎群中央南に位置していた騎兵旅団司令部の跡は、現在「習志野市民プラザ大久保」「八幡公園」などになっていて、公園には当時の門柱や「習志野騎兵旅団発祥の地」碑などが建っています。

生産工学部津田沼キャンパスには、図書館の脇に「騎兵第十四聯隊発祥之地」「戦車第二聯隊の跡」など当時を偲ぶ碑が並び、塀を挟んで東邦大学習志野キャンパスにも、「司馬遼太郎氏文学碑」※「騎兵第十三聯隊発祥之地」碑などが並んでいます。

北習志野の演習場跡地（現習志野台）は、戦後は引揚者などが入植する開拓農地となっていました。昭和37年、日本第一学園（現日本大学第一学園）はその一郭を購入し、43年に千葉日本大学第一高等学校、45年に同中

学校、61年に同小学校を開校しました。39年には理工学部も隣接地を取得、40年から同学部習志野キャンパス（平成8年に船橋キャンパスと改称）とします。41年には短期大学部工科が津田沼から移転、日本大学工業高等学校（現日本大学習志野高等学校）の全日制課程も設置しました。

本調査にご協力いただきました、額田記念東邦大学資料室に謝意を表します。

※騎兵第1旅団長も勤めた「日本騎兵の父」秋山好古が主人公の1人である、小説『坂の上の雲』に由来する。

（高橋）

【参考文献】

習志野市教育委員会編『習志野市史』第一巻 通史編（習志野市役所、2005年3月）
荒川章二編『地域のなかの軍隊2 軍都としての帝都 関東』（吉川廣文館、2015年2月）



昭和58年頃の習志野台（赤枠内：日本大学習志野高等学校、上部：理工学部習志野キャンパス、左手前：千葉日本大学第一中学校・高等学校のグラウンド）

創立者 末岡精一の調査

日本法律学校創立者の一人末岡精一は、^{すおう くまげ}周防国熊毛郡宿井村（山口県熊毛郡^{たぶせ}田布施町）の出身です。田布施町は山口県の南東に位置する瀬戸内海に面した町で、学祖山田顕義と同郷の出身とも言えます。本年3月、田布施町で末岡に関する資料調査を行いました。

田布施町は、岸信介・佐藤栄作という2人の内閣総理大臣を生んだ「宰相の郷」として知られていますが、吉田松陰を補佐し松下村塾で伊藤博文・山県有朋をはじめ山田顕義ら草莽の志士達を指導した富永有隣^{ゆうりん}の終焉の地でもあります。

郷土史に関しては田布施町郷土館が詳しく、館長西光氏（当時）は、富永有隣の縁者として末岡精一の名前は知っているものの、日本大学（の前身日本法律学校）の創立に関わっていたとはじめて知ったとのことでした。郷土館には、末岡精一が富永有隣に充てた書簡が現存します。

この書簡は、3月29日付けのものですが年代が分かりません。



末岡精一肖像
著書『比較国法学』より

拝啓、気候変換之節二御座候処、愈々御清適奉遥賀候、私儀一昨年来病氣之為御起居奉問之為二書状モ差上不申失礼仕候段御赦免被下度候、昨年十二月二十日村井氏卒去サレ候二付、特二子供方二対シ気毒至極二御座候、入江長祐氏は、当節は至極血色能ク病氣全治致候カト奉存候、私儀病氣之昨年来著シキ変モ無御座、幾分力快方二御座候間乍憚御休神奉願候、先日ヨリ二週間之休暇に付相州酒匂二転地療養致居候、先は御起居奉問之為寸楮奉呈候、謹言

三月廿九日

精一拝

尊伯父様 侍史

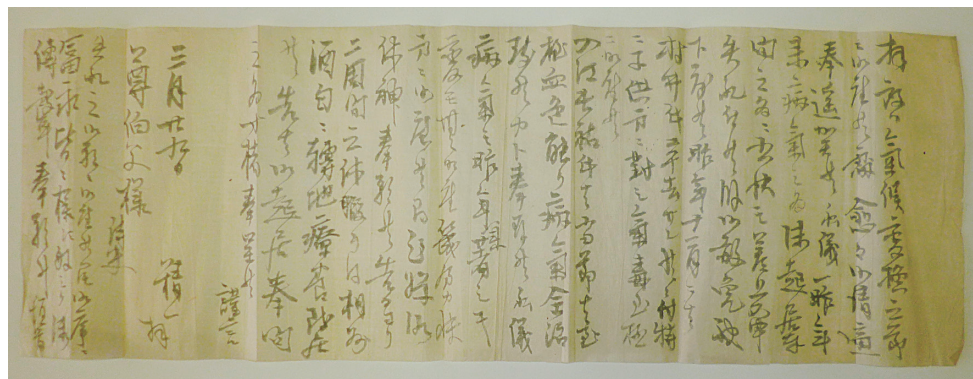
失礼之御願に御座候へトモ、御序二富永皆々様え好シク御伝声奉願候、頓首

宛名に「尊伯父」とあるように、末岡は有隣の甥になるのです。

末岡家は祖先以来しばしば庄屋を務める旧家でした。末岡精一の父景徳は二男一女の父親として一家を構えて

いましたが、若くして妻と死別します。

このとき、田布施村の出身で、吉田松陰の門下生として伊藤博文や井上馨と親交が厚く富永有隣とも交友のあった萩藩士佐藤寛作（信寛）の周旋により、有隣の妹とみと再婚して富



末岡精一書簡（田布施町郷土館蔵）

永家を相続することになり、長男とともに富永家に入りました。そして、次男の精一が末岡家を継いだのです。慶応2（1866）年のことでした。余談になりますが、この佐藤寛作（信寛）が、岸・佐藤両総理の曾祖父にあたります。

富永有隣は、明治3（1870）年に起きた政府の兵制改革実施に対する山口藩諸隊士の脱退騒動の首謀者と目されて逃亡し、各地を転々としていましたが、同11年についに逮捕されました。大審院判決で終身刑となり石川島監獄に収監されましたが、17（1884）年に特赦される一終身刑の政治犯がわずか5年たらずで特赦となったのも、政府の中枢にいた司法卿山田顕義らかつての松下村塾の教え子たちの画策であろうという見方もあります—と、甥の入江長祐のもとに落ち着きます。2年後の19年、入江に帰郷をすすめられ、実妹の住む熊毛郡城南村（田布施町）の元に身を寄せ、私塾を開き後進の指導にあたったといえます。

さて、書簡の前段に昨年（明治25年）の12月20日に村井氏が卒去したが、子供達が気の毒だと書かれています。『勤王志士富永有隣先生小伝』に、富永の血縁で「あたらその偉材を囑望され乍ら夭死せる陸軍中佐村井頼成」という人物がおり、村井頼成は山口県士族で明治24年9月少佐に昇進し野戦砲兵第6連隊第3大隊長に補され、25年5月勲六等瑞宝章を賜ったが、同年12月26日に39歳で死去しています（『明治過去帳』）。末岡は20日と記し、日にちのずれがあります、末岡のいう「村井氏」のことでしょう。よって、この書簡は明治26年3月29日の日付を持つ末岡書簡ということになります。



法学博士末岡精一碑

また、書簡には、富永有隣が特赦を受けて仮寓した「入江長祐氏」なる人物も登場しますが、入江も『勤王志士富永有隣先生小伝』によれば富永の縁者で、入江は当時宮内省主殿寮の舎人職にあった（明治25年『職員録』内閣官報局）ようですが詳しくは分かりません。

書簡では、末岡は一昨年より（つまり明治24年頃から）病気だといひ、昨年も病気がちだったがこのところ小康を得たので2週間ほど休暇をとって「相州酒匂」へ療養に行いったといひます。「酒匂」は地名ではなく、おそらく酒匂川流域の山北町・開成町・松田町（神奈川県）の温泉地で保養したのでしょうか。末岡は元来身体が丈夫でなかった様子が見えます。

明治25年頃というと、末岡は帝国大学法科大学の教授であり、日本法律学校では行政法の講義を担当、またこの年9月には東京専門学校（早稲田大学）の講師を兼務することになり、合わせて著書や論文も積極的に執筆している時期です。

末岡は、文部省特別留学生としてドイツ（ベルリン大学）・オーストリア（ウィーン大学）で国法・行政学の修業を命ぜられた将来を囑望された新進の学者で、人柄も温厚で高潔、講義も分かりやすく学生の質疑に丁寧に

答えるのを好んだといひ、病気が進行して同僚・親戚の者が療養を勧めても聞かなかったということです。

明治27（1894）年1月、末岡はわずか40歳で逝去しました。末岡と同年生まれで帝国大学法科大学長穂積陳重は「嗚呼真正ノ学者ハ死スルトモ死セズ、其身没スルノ後其事業猶永ク存ス」と、早すぎる死を悼んでいます。

末岡の顕彰碑が、田布施町城南区の瓜迫農業公園の向かいのこんもりとした木々の間に、富永有隣の碑とともに建っています。碑石だけで2メートル程もある立派なものです。昭和13(1938)年に建立され、一木喜徳郎いちき きとくろうが書しています。一木は、法制局長官・文部大臣・内務大臣等を歴任した官僚政治家として有名ですが、帝国大学法科大学教授時代の明治30年代には、日本法律学校で行政法の講義を担当していました。

(田淵)



富永有隣碑（中央奥に末岡精一碑）

【参考文献】

- 『日本大学百年史』第一巻（1997年3月）
- 田布施町史編纂委員会『田布施町史』（1990年12月）
- 海原徹著『松下村塾の明治維新』ミネルヴァ書房（1999年2月）
- 大植四郎編『明治過去帳（物故人名辞典）』（1971年1月）
- 富永有隣先生事蹟顕彰会『勤王志士富永有隣先生小伝』（1936年）

全国大学史資料協議会東日本部会2016年度総会



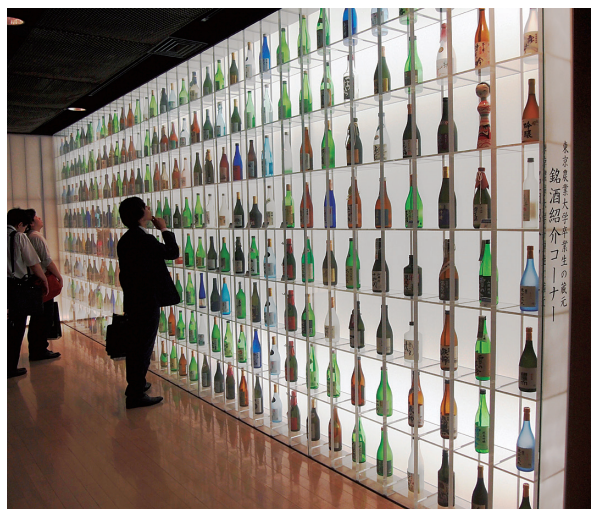
実学の杜

「実学の杜」は、「農大の建学の精神と教育の理念に触れる」「農大の歴史を伝える」「農大の今を知る」をテーマに、同大学の歴史と現在を分かりやすく伝える施設で、見学も行われました。

その後、『『食と農』の博物館』と隣接する展示温室「バイオリウム」の見学も行われました。『『食と農』の博物館』1Fは学祖榎本武揚・横井時敬や大学史関係、2Fには121体のニワトリの剥製学術標本、卒業生の蔵元が造る280本の銘柄酒、約3,600点の古農具等が展示されています。

5月26日、全国大学史資料協議会東日本部会総会が東京農業大学世田谷キャンパスの、農大アカデミアセンター地下1階横井講堂で開催されました。

総会後は、東京農業大学図書館事務課の畑川直哉氏から農大アカデミアセンター内にある展示施設「実学の杜」や「図書館」についての説明がありました。1Fの



「食と農」の博物館
2F「銘酒紹介コーナー」

皆様のご意見をお寄せください

刊行物に関するご意見・ご要望 大学史に関する問合せ先

日本大学企画広報部広報課（大学史） E-mail:nuhistory@nihon-u.ac.jp
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

活動報告

平成27年10月～平成28年3月
（広報部大学史編纂課としての活動）

○調査研究等

27年

- 10月7日～9日 全国大学史資料協議会総会・全国研究会（東北大学・東北学院大学）
11月11日・14日 学祖及び圓谷弘関係資料・史跡調査
（岩手県和賀郡西和賀町・秋田県大仙市及び仙北市）
11月12日～13日 全史料協全国大会（大仙市大曲市民会館等）
12月2日～4日 学徒兵及び山岡萬之助関係資料・史跡調査（長野県上田市及び岡谷市）

28年

- 2月5日～6日 上條愼藏関係資料調査（長野県松本市）
3月2日～4日 学祖関係資料調査（山口県下関市・山口市・萩市・熊毛郡田布施町）

○講演

27年

- 11月23日 シンポジウム「戦後70年 法政大学と出陣学徒－記憶と記録」にパネリストとして参加
（法政大学市ヶ谷キャンパス）
12月18日 付属高等学校・中学校教員採用内定者オリエンテーションでの講演（日本大学会館）

28年

- 3月8日 新規採用（一般職）研修（導入研修）での学祖講演（日本大学会館）

N. 日本大学大学史ニュース

第11号

2016年9月26日 発行

編集・発行 日本大学企画広報部広報課
〒359-0003 埼玉県所沢市中富南4-25
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

印刷 株式会社 文成印刷

(2016.9.26 11000)